

氏名	つち や あつ お 土 屋 敦 夫
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学位記番号	論 工 博 第 2742 号
学位授与の日付	平 成 5 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	近 代 に お け る 歴 史 的 都 市 と 工 業 都 市 の 形 成 の 研 究

論文調査委員 (主 査)
教 授 西 川 幸 治 教 授 加 藤 邦 男 教 授 三 村 浩 史

論 文 内 容 の 要 旨

この論文はわが国の近代都市の形成について、歴史都市と工業都市を比較・対照して考察したものである。

第1部では近代における城下町・金沢の「使い変え」と歴史的住宅建築について検討している。歴史的都市における近代の都市形成は、周辺部への市街地の拡大より、城下町の都心部を時代に対応するように、どのように使い変えたかに力点があると指摘した。まず人口動態に注目し明治維新による武士の没落で城下町金沢の経済は破綻し、明治30年まで人口は減少しつづけた。金沢都心部の公用地の変化をみると、城郭内外の藩政期の公用地や、空地となった武士宅地が公用地化され、師団による軍用地や都市施設が建設された。そして変革期の大幅な都市施設の使い変えの意味（明治維新時の旧武士住宅地・敗戦時の旧軍用地の転換）、明治期の旧建築の再利用、文化施設の拡充と景観への配慮、文化施設の都心部集中構想により、都心部都市施設が文化・公園施設に「遷移」したことなどを結論づけた。金沢では城下町以来の遺産を活用することにより、新しい時代に対応してきたのである。

このような「官」の側の施設の変化に対して、「民」の側の住宅建築は、戦前期まで、旧町人地には町家、武家地には武士住宅の系譜を引く近代和風住宅が建ち、住様式の伝統がかなり守られたことを明らかにした。金沢の市街地が、いまま城下町時代の景観構造をもっているのはこの理由による。ただ、これらの住宅も、表構えをみると、町家は明治後期以後背が高くなり、和風住宅では大正期以後入母屋型がふえてゆく。間取りでは、いずれも2階を主座敷とする型がふえてきた。

第2部は、工業都市・八幡の都市形成について検討している。

新興工業都市として、明治29年官営製鉄所の設置が決定されてから、急激に成長していった八幡をとりあげ、都市形成の過程を論じている。政府は八幡製鉄所を建設したが、建設されるべき都市の基盤整備は、すべて地元で要求した。工業ができると、その周辺に労働者の町が形成され、工場は3期にわたり隣接用地を買収して拡張した。工業都市にとって工場に近い土地は繁華街となったが、工場の拡張によってとりこわされた。また戦時中は、強制疎開により工場周辺の家屋は取り壊され、戦災で八幡の中心部は全滅し

た。

このように工場と都市は、せめぎあいを繰り返してきた。もともと工業都市は商業機能が弱いうえ、八幡ではその蓄積が否定されつづけてきた状況を明らかにした。そして地形的にも限界のあった八幡市は、昭和38年自立性を放棄し、北九州5市の合併にかけざるをえなくなった。なお、新市街地の形成を、都市計画手法の進歩という点からみると、街路位置指定、耕地整理土地区画整理事業と発展していった状況を明らかにした。

第3部は歴史的環境の保存と活用についてのべ結章とした。

結章ではまず、都市の歴史的環境とは、都市がどのように造られてきたかを表現するものであり、そこに蓄積された空間の意味をきちんと受けとめ、それを次の時代のために、より発展させてこそ、のぞましい都市の将来が実現できるとした。そのための保存修景計画の実験を京都嵯峨野、東山八坂、金沢の町なみの保存になどついて、具体的手法を示している。これらの成果の上に、歴史的都市金沢と工業都市八幡における歴史的環境の保存と活用について論じている。金沢は城下町の歴史遺産を利用し、使い変えることによって近代が展開してきたことを指摘し、金沢では、都市空間に歴史的蓄積が重層的に残されており、この歴史的環境の存在が金沢という都市の将来をも保証すると結論づけている。工業都市八幡については、都市空間への歴史的蓄積が否定され続けてきたことにより、都市空間が未成熟であることを指摘し、これからの都市空間を豊かにするために、近代工業都市建設の苦難の100年の歴史をきちんと評価し、産業技術史の記念物として注目し、思い切った再活用の手法を考える必要があると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

この論文は、わが国の近代都市の形成過程について、城下町金沢と工業都市八幡をとりあげ比較検討したもので、えられた成果は次の通りである。

1. 城下町・金沢について、まずその人口動態に注目し、維新ののち第九師団の設置される明治30年まで人口は減少しつづき、金沢の都市部は大きく変貌した。城郭内外の藩の公用地、武士の宅地が師団による軍用地や近代の都市施設に転用され、さらに昭和20年の敗戦によって、都心部の軍用地は明治建築の再利用、文化施設の拡充整備にあてられ、都心部の施設がしだいに文化・公園施設に「遷移」したことを明らかにした。いっぽう、住宅の建築は旧町人地には町家、旧武家地には武家屋敷の系譜にたつ和風住宅がたち伝統的景観を保っていることを明らかにした。

2. 工業都市・八幡は明治29年の官営製鉄所の設置にはじまり、工場内の丘の上に幹部の官舎をおき、工場に接して労働者の町が形成され「城下町」に類似した構成を示した。やがて工場が拡大すると、労働者の町は工場にくみこまれ、さらにその周辺へと移動するという過程をくり返した。戦災で八幡の中心部は壊滅した。戦後、復興・更新・拡大がはかられたが、元来商業機能がよわく、蓄積を否定する拡大過程が都市の脆弱さを指摘した。

3. 都市がもつ歴史的蓄積をいかし、その再生をめざす保存修景計画の積極的意義と手法について具体的に検討し、金沢と八幡についても、それぞれその再生と活性化をはかるために重層的蓄積を活用した計画を示し、産業技術史的視点にたつ工場施設などの活用の方策などを示した。

以上、要するに本論文はわが国を近代都市の形成について歴史都市と工業都市の対象として比較検討し、その特性を明らかにし、その伝統遺産を継承する保存修景計画を提示したもので、学術上實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は京都大学博士（工学）の学位論文として価値あるものと認めた。また、平成5年6月22日、論文内容とそれに関連する事項について試問を行なった結果、合格と認めた。